

ている。長期酸分泌抑制薬投与に関しては、主に海外から有害事象に関して様々な報告があり、効果的な最小限の用量で使用する事が推奨されている。

最近、注目されている自己免疫性胃炎は、胃底腺領域の高度粘膜萎縮および化生を認める、神経内分泌腫瘍（NET）や胃癌を合併しうる。抗壁細胞抗体や抗内因子抗体が陽性で、鉄欠乏性貧血がビタミンB12低値の悪性貧血に先行する。悪性貧血に伴う重急性脊髄連合変性症や自己免疫性甲状腺疾患の併発（多腺性自己免疫症候群

3B）にも注意が必要である。

近年、炎症性腸疾患に加えアレルギー疾患が増加し、*H. pylori*感染との負の相関がメタ解析の結果で報告されている。好酸球性消化管疾患（eosinophilic gastrointestinal diseases：EGIDs）は、アレルギー反応が主因となって好酸球が消化管壁局所へ異常に集積することで機能不全を起こす疾患である。病態は食道・胃・小腸・大腸の臓器毎に異なり、本疾患を念頭においた鑑別診断が重要である。

9. アレルギー性気管支肺アスペルギルス症/真菌症診療の最前線

東海大学医学部医学科内科学系呼吸器内科学 浅野浩一郎

外部環境アレルゲンへの曝露は様々なアレルギー疾患の発症を誘発し、例えば小児発症の喘息においてはダニアレルゲン曝露が重要である。一方、真菌（カビ）、特にアスペルギルス属真菌は外部環境から吸入されるだけでなく、粘液線毛クリアランス機能の低下した喘息気道に生きたまま定着（腐生）しうる特性と、I型アレルギーに加えて複合的な微生物に対する自然・獲得免疫応答を誘導する特性をもっており、アレルギー性気管支肺アスペルギルス症/真菌症（allergic bronchopulmonary aspergillosis / mycosis, ABPA/ABPM）という病態をきたしうる。臨床的には末梢血好酸球数の増加や顕著な高IgE血症がみられ、真菌特異的IgE抗体・IgG抗体が陽性となる。病理学的には真菌菌糸を含み好酸球に富む粘液栓が気管支内に嵌頓し、粘液栓の拡大によって気管支壁が外側に圧排され不可逆的な中枢性気管支拡張をきたす。標準治療は副腎皮

質ステロイド薬の全身投与、またはアゾール系経口抗真菌薬治療であるが、治療に対する初期反応性は良好であるものの薬剤の減量中止によればしばしば増悪し、4～6カ月の標準治療によっても臨床的寛解が得られるのは約半数にすぎない難治性疾患である。

2013年にこの疾患に対して呼吸器・アレルギー学、真菌学、病理学、免疫学、化学、建築学などの研究者が参加する研究班が設立された。当時は診断までのdoctor's delayが約7年という状況であったが、現在までに原因真菌、病態、診断、治療、予防に関する様々な新しい知見が明らかとなっている。今回の教育講演では好酸球を介した病態形成機序、新しい診断基準と重症度分類、スエヒロタケ（真正担子菌、いわゆるキノコ類の一種）によるABPM、気候温暖化に伴ってより重要となる居住環境内真菌の制御、などについてご紹介させていただきたい。